

利用場面による都市公園の評価構造に関する研究： 異なる利用場面を想定して抽出した評価構造の比較

李, 静雅
九州大学大学院芸術工学府 : 博士課程

大井, 尚行
九州大学大学院芸術工学研究院 : 教授

<https://hdl.handle.net/2324/6791138>

出版情報 : 日本建築学会九州支部研究報告集. 62, pp.33-36, 2023-03. Architectural Institute of Japan

バージョン :

権利関係 :



利用場面による都市公園の評価構造に関する研究 —異なる利用場面を想定して抽出した評価構造の比較—

正会員 ○李 静雅^{*1} 同 大井 尚行^{*2}

4.環境工学—1.環境心理・生理 環境工学

都市公園 評価構造 評価グリッド法 利用場面

1. はじめに

都市公園などの公共空間は、魅力的な都市を作るために必要なものとして注目が集まっている。だれでもいつでも利用することができ、都市生活者の多様で自由なアクティビティの受け皿として、都市や地域の活性化に貢献する極めて高いポテンシャルと持っている。しかし、利用者側からみると、都市公園などの公共空間は、いくつかの選択肢の中からどれを選択して利用するかという意思決定が必要となり、利用場面によってニーズが異なれば異なる空間を選択して利用すると考えられる。利用者のニーズを把握して空間設計を行うためには、利用場面ごとの評価構造を表現したものがあるとよいと考えられる。¹⁾

讃井ら²⁾が提案した評価グリッド法は、建築学をはじめ、都市計画や商品開発における評価構造の抽出に幅広く活用されている。しかし、人々の住環境評価の実態を個人を単位に明らかにするために提案された評価グリッド法は、都市公園のような公共空間の評価に応用するには、相互に関連した二つの問題があると考えられる。一つめは、回答者に場面想定を任せて抽出した評価構造は、回答者が想定した場面に限定された評価構造の一部すぎない可能性があるが、想定された場面が不明ことである。そして二つめは、場面ごとに異なる可能性のある空間に対する評価構造全体を把握しようとする場合には、個人の中でも多様な利用場面に応じて生じる可能性のある違いを包括的に考慮した評価構造の抽出方法を探る必要があることである。¹⁾

既報¹⁾では利用場面を指定して評価構造の抽出を行った。本研究では、既報の結果と、利用場面を指定しないで抽出した評価構造を比較分析することにより、異なる条件により得られた評価構造にどのような相違点

があるかを明らかにすることを目的とする。

2. 調査概要

評価構造を抽出するための手法として評価グリッド法を用いてインタビューを行った。調査対象者は、ある程度経済的・精神的に自立しており、相対的に時間が自由に使えて行動範囲が広いと考えられる大学生と大学院生とした。

調査で用いたエレメントは、インターネットで検索した公園の写真とした。座れそうな場所としてベンチ、段差、芝生が含まれているものや、自然を感じる要素の樹木、池などが含まれているものなど、異なる空間構成要素を写っている写真を16枚選定した。写真のサイズを5.7cm×8.7cmに揃えてプリントアウトしたものをエレメントとした。エレメントの例を図1に示す。



図1. エレメントの例^{注1)}

まずは、評価グリッド法を用いて利用場面を指定しないインタビュー調査を行った。13名〔男性5名/女性8名〕の学生が回答者として調査に協力してもらった。回答者に16枚のエレメントを「利用したいかどうか」を基準にして3つのグループに分けてもらった。その後にグルーピングの理由を訊き、ラダーリング

を行った。

その後、利用場面を指定したインタビュー調査を行った。利用場面を一人で利用する場合と 3 種類の一緒に利用する人を利用場面として教示し、個人ごとに異なる可能性のある細かな行為については回答者自身に想定してもらった。設定した一緒に利用する人は、大学生と大学院生が想定しやすいと考えられる「家族」「友達」「恋人」とした。まず 16 枚のエレメントを提示し、これらを「一人で利用するのに適しているかどうか」を基準にして 3 つのグループに分類してもらう。その次に分類理由を訊き、ラダーリングを行った。同じ手順で分類基準の「一人での利用」を「家族との利用」、「友達との利用」、「恋人との利用」に順次に設定し、評価構造を聞き出す。回答者は前述した利用場面を指定しないインタビューに参加した 13 名の大学生と大学院生に 24 名を加え、計 37 名〔男性 15 名/女性 22 名〕である。

3. 調査結果

3.1 全体評価構造図の作成方法について

利用場面を指定しないインタビュー調査の結果として 13 枚の個人評価構造図を抽出した。個人評価構造図をまとめ、全体評価構造図を作成した。全体評価構造図は図 2 に示す。つながり線は項目の上に重ならないように、一部の評価項目を数カ所分けて配置した。分けて

配置した項目に「※」を付け、回答数を下位に位置する項目の一カ所にまとめて示している。また、2 回以上出現した評価項目の回答数を括弧に数値を示しており、項目の間にラダーリングによって関連付けられた人数の多少を線の太さで示している。

利用場面を指定したインタビューの結果、回答者一人につき 4 つの条件ごとの個人評価構造図が得られた。また、評価項目を 2 回以上出現した項目を集計し、回答の際の項目間のつながりをまとめて作成した全体評価構造図は図 3 に示す。前述した全体評価構造図と同様に、括弧内に回答数を示し、関連付けられた人数の多少を線の太さで示した。また、数カ所に分けて配置した評価項目に「※」を付けた。そのほか、特定の利用場面だけに出現した項目に網をかけた。¹⁾

3.2 上位項目について

利用場面を指定したインタビュー結果の全体評価構造図により、「リラックスできる」「落ち着く」「眺めがいい」という項目はいずれの条件においてもみられた。これらの評価項目は、利用場面を指定しないインタビューの結果においても見られた。利用場面の想定を回答者に任せため、回答者が複数の利用場面を想定した可能性があり、想定した利用場面が不明である。一部の利用場面のみに出現した評価項目がみられた。それは、一人での利用または恋人と利用する場合に出現し

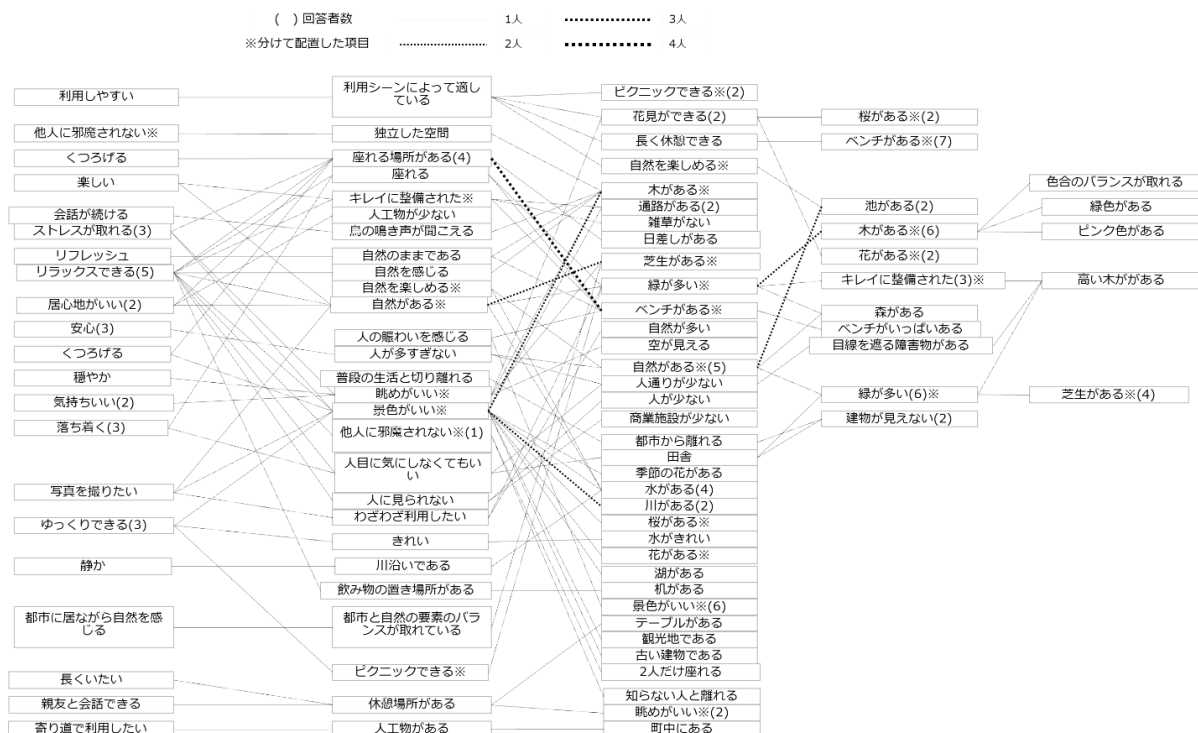


図 2. 利用場面を指定しないインタビューによる全体評価構造図



図 3. 利用場面を指定したインタビューによる全体評価構造図¹⁾

た「癒される」、家族と利用する場合に挙げられた「幸せ」、友達と利用する場合に出現した「快適」「便利」といった項目と、恋人と利用する場合に挙げられた「ロマンチック」と「イチャイチャできる」といった項目である。これらの項目は、利用場面を指定しない調査結果にみられなかった。これにより、抽出した評価構造はその教示した条件に依存している可能性があると考えられる。

3.3 自然に関する項目について

利用場面の指定に関わらず、自然に関する項目が多く挙げられた。公園に対して自然に関する項目を多くの人が求められていると考えられるが、利用場面を指定した場合の全体評価構造図により、利用場面ごとにつながりがやや異なることが見られた。一人で利用する場合は、「眺めがいい」は「水がある」と関連付けられた回答が 5 人ほど多くみられたが、家族と利用する場合は、「木がある」という項目は「眺めがいい」と関連付けられた回答が多かった。また、「芝生がある」という項目は「ピクニックできる」と関連付けられた回答が多かった。また、友達との利用または恋人との利用においてはいずれも「緑が多い」という項目が「眺めがいい」と関連付けられた回答が 3 人という比較的が多かった。公園に対してどの利用場面においても自然の要素を求められるが、利用場面により求められている具体的な自然要素がやや異なることがわかった。

3.4 行為について

利用場面を指定しないインタビュー結果により、回答者が想定された行為は会話、座る、写真を撮る、ピクニック、花見などが見られた。利用場面を指定したインタビューの結果により、一人で利用する場合は「本を読む」、家族と利用する場合は「子供が遊べる」、友達と利用する場合は「散歩できる」、恋人と利用する場合は「散歩できる」や「遊べる」など、利用場面を指定しないインタビュー結果にみられない項目があった。一方、利用場面を指定しないで抽出した評価構造に示した「写真を撮りたい」、「花見ができる」といった項目は利用場面を指定した評価構造図に見られなかった。利用場面を指定しないインタビューに参加した回答者の全員が利用場面を指定したインタビューに参加したことから、

教示による抽出した項目やつながりが異なると考えられる。また、評価項目そのものは常に個人の判断基準として存在していると考えられるから、評価項目またはその間のつながりが、ある条件において挙げられなくても、ほかの条件で挙げられた場合は、その評価項目のつながり自体は存在している¹⁾と考えられる。

4. まとめ

本研究は、利用場面を指定せず抽出した評価構造を既報¹⁾の利用場面を指定して抽出した評価構造を比較することにより、以下のような結論を得た。1) 上位項目については、一部の利用場面だけに出現した項目がみられたことから、回答者が回答した評価構造はその条件に依存している可能性があると考えられる。2) 自然に関する項目については、今回の対象環境である公園に対してすべての評価構造図に自然に関する項目が見られたが、利用場面により具体的な自然要素の回答数や項目間のつながりがやや異なることがわかった。3) 行為については、利用場面を指定して抽出した評価構造により一部の利用場面だけに出現した行為がみられたほか、利用場面を指定せず抽出した評価構造にしかみられない項目もあった。ある条件において挙げられない評価項目はほかの条件に挙げられた場合は、その評価項目自体が存在すると考えられる。

以上のことにより、評価グリッド法による評価構造の抽出には、調査者が想定される利用場面を指定するかどうかににより相違がみられた。利用場面を想定して抽出した評価構造により、利用者の要求が利用場面ごとに把握することができると考えられる。

注

1) エレメントはインターネットからダウンロードし、横縦比を固定してサイズを揃えた。エレメントごとに右下に番号を付けた。図 1 に用いた画像の引用元は下記の通りである。

Blohm park : www.gaithersburgmd.gov/recreation/parks-fields/blohm-park (2022.10.7 最終アクセス)

百合が原公園 : yuri-park.jp (2022.10.7 最終アクセス)

須崎公園 : fukuoka-sanpo-blog.com/chou-ku/suzaki-park-main (2022.10.7 最終アクセス)

田園調布宝来公園 : tokyo-chintai.net/diary-detail-407909 (2022.10.7 最終アクセス)

参考文献

1) 李静雅, 大井尚行: 公共空間の評価構造に関する研究 ―異なる利用場面を想定して抽出した評価構造の比較考察―, 日本建築学会環境系論文集, 第 88 巻, 第 805 号, 2023

2) 讀井純一郎, 乾正雄: レパートリ・グリッド発展手法による住環境評価構造の抽出 ―認知心理学に基づく住環境評価に関する研究(1)―, 日本建築学会計画系論文報告集, 第 367 号, pp15-22, 1986

*1 九州大学大学院芸術工学府 博士課程・修士(芸術工学)Graduate School of Design, Kyushu University, M.Design

*2 九州大学大学院芸術工学研究院 教授・工博

Prof., Faculty of Design, Kyushu University, Dr. Eng.